



ブラジル特報

特集

どっこい技術の国

- ・ブラジルの航空機技術
ITA-Embraer の夢羽ばたく
- ・ブラジルにおける
小規模バイオエネルギーコミュニティについて
- ・日伯友好病院～医療スペシャリストによる
ハイレベル地域診療

あの町この町

ブルメナウ

No.1642
2018年1月号

新規会員募集中!
詳しくは P21 をご覧ください。



一般社団法人 日本ブラジル中央協会

URL <http://nipo-brasil.org/> E-mail info@nipo-brasil.org

〒105-0004 東京都港区新橋 1-18-2 明宏ビル本館 5 階 TEL:03-3504-3866 FAX:03-3597-8008 発行人: 大前孝雄/編集人: 岸和田仁



三井物産株式会社 www.mitsui.com/jp



世界の未来を、ブラジルとつくる。

〔Business innovation-1〕

旅客鉄道事業に参画、400万人の市民の足を担う。

オデブレヒト・トランスポート社と共に、都市交通インフラを整え、都市の発展に貢献。

〔Business innovation-2〕

水力発電事業により、CO₂排出の少ないエネルギー開発を推進。

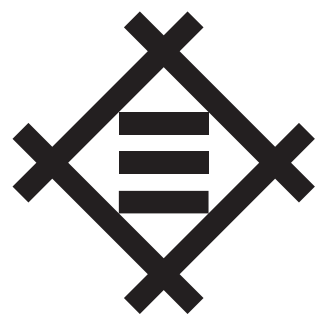
川の自然な流れを活かす流れ込み式水力発電事業を通じ、約1千万人分の電力を大都市圏へ供給。

〔Business innovation-3〕

ITを活用した教育事業で、次世代の人材育成に貢献。

オンライン教育事業のギーキー社に出資参画。一人ひとりの効果的な学びをサポート。

世界の未来を、世界とつくる。三井物産



MITSUI & CO.

目次

(あの町この町) ブルメナウ [戸高久光]	3
(ブラジル・ナウ) メキシコからブラジルへ [山田 彰]	5
【特集】 どっこい技術の国 ブラジルの航空機技術 ITA-Embraer の夢羽ばたく [松野哲朗]	6
【特集】 どっこい技術の国 ブラジルにおける 小規模バイオエネルギーコミュニティについて [内ヶ崎万蔵]	8
【特集】 どっこい技術の国 日伯友好病院 医療スペシャリストによるハイレベル地域診療 [天内ヴァルテル] ...	10
(特別寄稿) 本物のサッカー少年育てる！ ジーコが始めた 20 回目の「日伯友好カップ」 [高島雄大]	11
連載・ブラジル現地報告 リオ五輪レガシーと移民のレガシー 「東京五輪とブラジル移民110 周年へ向けて」 [戸田和敬]	12
(日系企業シリーズ・第 50 回) 南米新日鐵住金 鉄の宝庫ブラジルとの絆 [能勢大伸]	13
(ビジネス法務の肝) 知的財産権と税務関係 [ホベルト・カラベト]	14
連載★税務の勘どころ 高税率で複雑なブラジルの消費課税 (その 2) [都築慎一]	15
(連載エッセイ) さようなら、私の美しい日本 [ドナテッラ・ナティリ ファラーニ]	16
(ウーマン・アイ) 世界の市民 [羽山ネイデ]	17
(ジャーナリストの旅路) あの笑顔と活気は忘れない [中井良則]	17
(連載文化評論) トーマス・マンとブラジル 亡命先の米国で抱いた“望郷の念” [岸和田仁]	18
最近のブラジル政治経済事情	19
新刊書紹介	20
(びっくり豆知識) 「冬季五輪」に喜んで参加しますか？	20
協会からのお知らせ	21



写真家田中克佳の「表紙のひとこと」
「世界最大の砂糖生産国ブラジルは、サトウキビを利用したバイオエタノール生産の先進国だ。写真はエタノールの精製工場の様子。ガソリンとエタノールの混合使用が可能なフレックス車は、国内の走行車の半分以上を占めている。」
(65 年生まれ、早稲田大卒、博報堂入社。93 年に退社後渡米し、独立。ニューヨーク在住。www.katsutanaka.com)

ブルメナウ

夏場に多くのアルゼンチン人で賑わうカンボリウ海水浴場から約 57km、港町イタジャイを経て、川沿いの道路を走ると、サンタカタリーナ州 3 番目の人口約 35 万人のこの町に着く。川と海岸山脈に囲まれたこの町の所々にドイツ特有の「木組み造り」の建物が目に付き、「小さなドイツ」と呼ばれるブルメナウを感じ始める。

この町は、1850 年 9 月 2 日にブルメナウ博士と 17 人のドイツ人移民によって設立された。その後、イタリア人移民も入植し、2 つの国の習慣・文化の違いによる軋轢もあったが、今もドイツ系が市民の 50% 以上、イタリア系が 20% 以上となっている。ブラジル有数の繊維産業地帯として有名で、近年は電気電子・IT 関連の産業で知られている。

海拔 900m 超の海岸山脈から谷間を通して流れるイタジャイ・アスー川が大きく蛇行する海拔 21m に位置する為、大雨の時度々水害に悩まされて来た。1983 年の大水害は、町の大部分を 1 ヶ月近く水没させ甚大な被害を与えた。その後、上流のダム建設による治水工事に合わせ、市民の気分を高めそして観光客を引き寄せる為に、1984 年に「オクトーバーフェスト」が始まった。

お祭りの初日には、町の中心通りで、民族衣装に着飾った人々・音楽隊などの「お祭り開始」を告げる行進が行われ、メイン会場たる「ドイツ村」で 10 月上・中旬 (18 日間) 行われるブラジル最大のドイツ祭りだ。

地ビール&国内各地の生ビールで喉を潤し、各種ソーセージ、鴨肉にザウアークラウト (キャベツの漬物)、ポテト、塩味であっさり柔らかく煮込んだ豚の脛・豚肉の塊等でしっかり腹を満たす。その後は、男性はゼナーハット (帽子) とレーダーホーゼン (ドイツ南部地域で男性が着用する肩紐付き半ズボン) そして女性はディアンドル (エプロンドレス)、と民族衣装の人々がダンス・音楽と一緒に楽しむ。

2016 年の「オクトーバーフェスト」では、53.5 万人の観客が 66.3 万リットルの生ビールを飲み、1810 年に始まった元祖ミュンヘンのそれ (7 百万人の観客が 7 百万リットルの生ビール消費) に次ぐ第 2 位のスケールとなっている。

戸高久光
(在ブラジル 45 年)

グローバル人材の採用なら

日経HRは、日本経済新聞グループの人材情報企業として、新卒向け就職事業、社会人向け転職事業、キャリア教育事業をメインに展開しています。

日経HR独自の情報に加え、日本経済新聞社や日経BP社のコンテンツをベースに就職活動、学び、スキルアップ、キャリアデザイン、転職などのHR (Human Resources) 情報をインターネットや出版、イベントなどのクロスメディア展開により発信していきます。

日経キャリアNET

社会人のための転職サイト。日本経済新聞や日経・電子版、日経BP社の各種専門媒体を入り口としたビジネスに意欲の高い求職者と、人材を企業戦略の中核と意識する優良企業を結びつけます。



日経キャリアNET
http://career.nikkei.co.jp

キャリアコンサルティング(人材紹介)

エグゼクティブ、金融、IT系人材を中心に、人と企業をピンポイントで結ぶ人材紹介事業を展開しています。日経キャリアNETや日経グループ各媒体との連動やアライアンス・エージェントとの連携など、さまざまなご提案も行っています。

日経HR
Executive

プロフェッショナル、エグゼクティブ
のための転職支援サービス

20代、30代のための
転職支援サービス

日経HR
AGENT
NIKKEI HUMAN RESOURCES

日経アジアリクルーティングフォーラム

アジア9カ国のTOP大生を日本へ招待し、面接できるイベントを毎年8月に開催しています。2014年は北京大学、シンガポール国立大学、チュロンコン大学、インドネシア大学等、103名が来日し30名が内定獲得しました。

NIKKEI ASIAN
RECRUITING
FORUM in 東京



日経メディアで複合プロモーション

日経新聞・日経電子版、日経BP専門媒体(雑誌・Web・メルマガ・フォーラム)を活用した日経メディアの複合プロモーションで人材採用活動をお手伝いします。



仕事の先の幸せを創造する会社

日経HR
NIKKEI HUMAN RESOURCES

お問い合わせ 株式会社日経HR TEL:03-6812-7307
e-mail: webeigyo@nikkeihr.co.jp https://www.nikkeihr.co.jp



BRASIL NOW

ブラジル・ナウ

メキシコからブラジルへ

2017年8月、メキシコからブラジルに赴任して、4か月近くがたった。両国を比較してみよという編集部のご指示だが、メキシコでは全国津々浦々を訪問したところ、ブラジルの方はまだいくつかの主要都市に行った程度である。

おまけにブラジリアは、人工的な首都で、ブラジルの中ではもちろん、世界の首都の中でも異色の町であり、ブラジリアをしてブラジルを語るのは無理がある。

メキシコの面積は日本の5倍強あり、風土・文化など多様な側面を持つ大変大きな国であるが、ブラジルは、そのメキシコの4.3倍の面積を持つ。ブラジルは、人種構成なども含めメキシコ以上に非常に多様な顔を持つ国である。

日本から見ると中南米の2大国というイメージで語られることも多いが、両国のアイデンティティは大きく異なるものがある。

かくもアメリカから近く

「神はかくも天国から遠く、アメリカから近くメキシコを作り給うた。」と慨嘆したのは、メキシコの独裁的大統領だったポルフィリオ・ディアス(1830～1915)である。メキシコは戦争などで国土の約半分をアメリカに奪われた歴史を持ち、隣の巨人であるアメリカとの関係をいかにマネージするかに常に大変苦労してきた。

1994年発効のNAFTAによって、メキシコは経済面でアメリカとの連携を深め、国を開き、投資を呼び込み、資源だけに頼らず、工業化を図る、という形で国を発展させて来た。この20年ほど墨米関係は安定していたと言ってよいだろう。しかし、トランプ政権発足以降、国境の壁の建設問題、移民問題、NAFTA再交渉など米国との関係については大変な「苦労」を強いられている。今日のメキシコにとって外交の優先順位は一にも二にも対米関係である。

ブラジルに来ると、米国との関係が緊張感をもって感じられることはない。もちろん、ブラジル外交にとっても米国は最重要国に位置づけられるのであろうが、『トランプ大統領にとって、ブラジルの存在はほとんど眼中にない(在伯外交筋の発言)』ようにさえ思えるし、一般国民にとって米国の動向は、遠い国の出来事である。

修羅場のなかった南米の大国

ブラジルは、アメリカから遠いだけではなく、ヨーロッパ

からもアジアからも遠い。一方で、ブラジルは南米の中では国土、人口、経済などあらゆる面で圧倒的な大国として特別な存在感を持つ。表現は良くないが、南米大陸での『お山の大將』でいられる。外部との競争にさらされているという感覚は薄い。また、ブラジルには、安全保障上真に脅威になるような国は存在しなかった。歴史上、ブラジルは、国土が大規模な戦争の戦場になることもなく、国外に戦争に打って出ることもなく、政治的な変革もおおむね大した流血を見ることはなかった。豊かな資源に恵まれ、国民が飢えに苦しむようなこともなかった。ある意味では羨むべきことであるが、ある人の言葉を借りれば、ブラジルは『修羅場をくぐったことがない国』である。

こうした歴史的、地政学的環境から考えると、ブラジルの変化というものは、外部の力より内在的な力で起こるのではないか、という気がする。

ブラジルは、大統領弾劾、大規模な汚職事件捜査の進展、2年連続のマイナス成長など危機的な状況を過ごしてきたが、2017年に入って、経済もようやく底を打ち回復軌道に乗ってきた。ブラジルの諸改革は徐々にではあるが、実現されつつある。ブラジルがその危機を克服するために自分たちの力で改革を進めれば、今後ブラジル社会はより良い方向に向かっていくのではないか。

最大の共通点：偉大なる親日国

日本大使として両国を見た時の最大の共通点は、いずれの国も日本に対する強い親近感を持っているということだ。長い移住の歴史(2017年はメキシコ移住120周年、2018年はブラジル移住110周年)を持ち、日系社会は現地の信頼を得ており、長年の官民による経済技術協力はそれぞれの国の発展に大きく貢献してきた。日本の科学技術への憧れやポップカルチャーへの高い関心も共通している。

メキシコでは、日本に対する親近感を持つ各地、各界の方々と幅広く、お付き合いをして楽しく過ごすことができた。ここブラジルでも、様々な地方を訪ね、こちらからいろいろな方に会いに行き、行事に参加して、日本のファンをさらに増やしていきたい。

尚、本稿は個人的見解によるものである。(2017年12月記)

山田 彰(駐ブラジル日本国特命全権大使)

ブラジルの航空機技術 ITA-Embraerの夢羽ばたく

ブラジルの航空機産業

ブラジルの航空機メーカー、エンブラエル（Embraer）は2018年、次世代機E2シリーズの納入を開始する。新シリーズは現在のE-Jetsシリーズよりも燃料消費や維持費が少なくてすみ、環境・騒音・キャビンの性能も優れていて、航続距離も長いことなどが売り物だ。まずE190-E2（97～114座席）の引き渡しから始まり、2019年以降はE195-E2（120～146座席）やE175-E2（80～90座席）も順次登場する。

このような座席数100席前後の小型ジェット旅客機をリージョナルジェットと呼ぶ。大都市と地方都市の間など、比較的距離の短い地域間を結ぶジェット機のことだ。エンブラエルの初代リージョナルジェットは現在のE-Jetsシリーズよりも一つ前のERJシリーズで、1996年から納入が始まった。同社は1990年ごろ一時経営危機に陥った経験があり、94年の民営化後、再生を賭けて投入したのがERJシリーズだった。それまでプロペラ機が中心だった地域間輸送がジェット機に置き換わると的確に予測したことがのちの成功につながった。

ただ、1990年代後半の時点では、4年早く引き渡しが始まっていたカナダのボンバルディアが市場をリードしていた。そこでエンブラエルはERJシリーズの設計を一新し、さらに大型化したE-Jetsシリーズを2004年から市場に投入し始めた。これが世界的にヒットし、リージョナルジェット分野でボンバルディアを追い越してトップ企業に躍り出た。ライバル機に比べて、居住性などの設計技術が優れていたのが勝因といわれる。

ここで、なぜ航空機のようなハイテク製品をブラジルで開発・生産できるのかという疑問が生まれるかもしれない。ブ

ラジルの自動車産業をみると、完成車メーカーは米国、イタリア、ドイツ、日本、韓国など外資系ばかりである。それにもかかわらず、自動車よりも部品点数が多い航空機を国内生産できるのは不可思議だと考える人もいるだろう。

ブラジル版 MIT

その謎を解くカギの一つがITA（航空技術大学）である。航空関連分野に特化した理工系の教育・研究機関であり、ここで教育を受けた人材がエンブラエルの技術力を担っている。所在地はエンブラエルの本社と同じ、サンパウロ州サンジョゼ・ドス・カンボス。サンパウロ市から長距離バスで2時間前後の郊外に位置する。生産施設のほか、空港、空軍の機関、大学、研究所などが立地し、航空宇宙に関連した産学軍の一大集積地となっている。

エンブラエルは1969年に空軍が主導して国営企業として設立された。しかし、ITAはそれより19年前の1950年に創設されている。リオデジャネイロにある軍の技術学校に航空工学コースができたのはさらに古く、1939年にさかのぼる。つまり、企業の設立よりもずっと早く、技術者の育成、技術の蓄積を目指す動きが始まっていたことになる。しかも、20世紀前半からの航空機産業史の比較的初期の段階から技術の土台を構築できたことがエンブラエルにとって幸運だったと考えられる。

ITAはマサチューセッツ工科大学（MIT）の航空工学科をモデルにしてつくられた。当初は米独仏など世界16カ国から教授陣を招いて航空技術を学んだという。ITAと同時期に設立された研究機関の航空技術センターと共同で新しい双発ターボプロップ機の試作が進むと、これを製品化するための企業として設立さ

れたのがエンブラエルであり、創業時のCEO（最高経営責任者）もITAの卒業生であった。

工科大学 ITA の概要

ここで、現在のITAの概要を示したい。ITAでは学士だけでなく、修士や博士も取得することができる。学部学生向けには、航空、電子、航空機械、航空土木、コンピューター、航空宇宙という6つの工学科がある。大学院生向けには、5プログラム22分野が用意されている。それらの分野には機械、生産、電子・コンピューター、インフラといった工学系だけでなく、宇宙、原子分子物理、原子核物理といった理学系・基礎科学に近いものもある。

学部学生は5年制である。最初の2年は基礎を学び、後の3年は専門に分かれる。各年は2学期制で、それぞれの学期は授業週が16週、試験週が2週、中間の休暇週1週の計19週で構成されている。授業は月曜から金曜日までで、理論は午前中、実験・実習は午後に行われる。最も早い授業は朝7時からスタートし、最も遅い授業は午後5時30分に終わる。学部学生は5年間、授業料・食費が無料であり、多くはキャンパス内の低家賃の寮に居住している。軍事訓練を受けながら学ぶことができるコースもあり、これを選択した学生には給与も支払われる。さながら「プロ学生」である。このような恵まれた環境に置かれる代わりに、学業が振るわない学生に退学を迫る厳しい基準が定められている。1学期に欠席が全授業の1割を超えると、規則に従って何らかの罰を受けることになっている。修士課程は約2年、博士課程は約4年のコースである。院生の多くは企業や公的研究機関から奨学金を得ている。社会人が勉学できる特別制度も設けられている。



松野哲朗
（経済ジャーナリスト）

ITAは超難関校として知られる。2018年に入学する学部学生のための入学試験（2017年12月実施）をみると、110人の募集に対して志願者は1万1135人に達している。単純計算すると倍率100倍ということになるが、例年、志願者の3分の1から4割は試験を受けないことなどを考えると、実際の倍率はもっと低いようだ。試験科目は数学、物理、化学、国語（ポルトガル語）、英語。教材は英語で書かれたものも多いため、英語力は重要である。国土の広大さを反映して試験会場は全国各地の24カ所に分散している（2017年12月入試）。全国から優秀な人材を集め、キャンパス内で規律のある勉学生活を過ごさせ、ついていけなくなった学生を容赦なくふるい落とす仕組みが出来上がっている大学なのである。さらに大学院に進み、研究に携わる人材はえりすぐりといえる。

学部学生の募集人員は2013年入学まではほぼ120人の水準に固定されていたが、これを倍増させる方針が示され、2014～15年には一時期170人にまで膨らんだ。しかし、2016年入学者から削減され、2017～18年は110人で推移している。2013年までよりも少ない水準である。2015～16年にブラジルを見舞った経済危機と財政難が影響しているとみられる。一方、給与をもらいながら学ぶ道もあるだけに、景気が悪いここ数年は受験者の数が増え、倍率が高まる傾向にある。女性にも人気の大学であり、2012年以降は毎年10人以上（全体のほぼ1割前後）の女子学生が入学している（女性の志願者は全体の4分の1程度）。

大学といっても、一般的にイメージされるような出入り自由のキャンパスではない。キャンパス内は研究・実験施設や図書館はもちろん、スーパーマーケットや診療所、スポーツ広場、プールや音楽・ダンス室を備えた寮などが整っており、快適に設計されているが、サンパウロ大学のようなオープンな一般大学とは趣が異なる。海外からの留学生は受け入れており、その中には日本からの留学生

2018年から引き渡しが始まる E190-E2
（エンブラエル社のサイトのメディアコーナー
から2017年12月4日にダウンロード）



も含まれる。卒業生の進路はエンブラエルだけでなく、空軍、研究所、他の民間企業など様々な分野に広がっているようだ。ビジネスの現場でITAの卒業生とかかわった複数の日本人ビジネスマンによると、卒業生たちはITA出身であることを誇りにしており、彼らが仕事に取り組む姿勢は真摯で評価できるという。ITAは教育機関であると同時に研究機関でもあり、企業や政府系機関との開発プロジェクトを管理・監督する部門も保有している。エンブラエルは自社で航空機の研究開発を進めているため、ITAが携わっているのは中長期的な将来を見据えた研究分野であるとみられる。

エンブラエルの開発現場

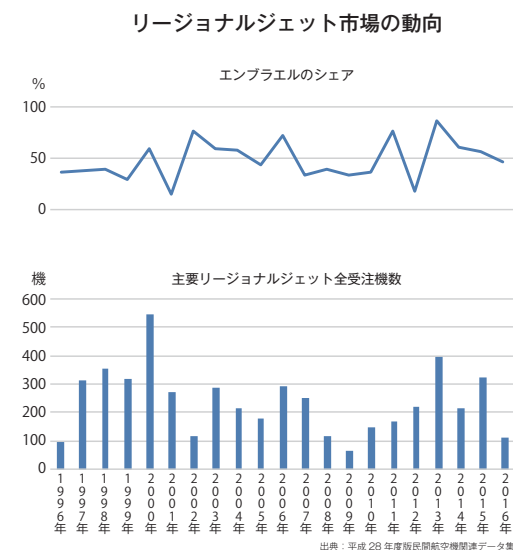
最後に、ITA出身の技術者が中核を占めるエンブラエルの開発の現場を紹介し、同社の技術者がどのような技能を発揮しているかをみてみよう。エンブラエルは他の航空機メーカーと同じく、国際共同開発体制を敷いている。E-Jetsシリーズの開発の場合、エンブラエルが構築したのは、ブラジル人技術者600人、米欧日16社からの外国人技術者400人を束ねる体制である。

航空機というのは、多様な部品を微妙に調整しあって安全性や乗り心地、燃費といった機能を実現していく製品である。パソコンのように部品を寄せ集めて組み立てれば比較的容易に機能を発揮できる製品ではなく、部品間の細かいすり合わせが不可欠である。E-Jets共同開発の肝は、様々な国から参加した技術者たちのすり合わせを円滑に進めることだといつてよい。

共同開発の場に実際に参加した外国人

技術者から筆者が直接聞いた話によると、エンブラエルの技術力の高さは驚くべきものだったという。エンブラエルが実行していたことは、航空技術の先進国・米国の開発現場でこの技術者が経験したことと全く同じレベルだったそうだ。各国からの技術者たちは1年以上、ブラジルに滞在し、大部屋のスクリーンに映し出される関係部品の設計案を見ながら、公用語である英語で細部の修正を重ねた。とりまとめ役であるエンブラエルの技術者に深い知識と調整・交渉力が求められることは言うまでもない。

次世代の小型ジェット旅客機はブラジルやカナダのほか、日本、中国、ロシアの各社が開発にしのぎを削っている。三菱航空機はそのうちの一社である。しかし、石油価格が以前ほどの高値ではない現状では、燃費が優れた次世代機に対する需要は必ずしも強くなく、市場環境は厳しい。エンブラエルーITAの技術者グループが今後どんな航空機を提案してくるのか、目が離せない。



ブラジルにおける 小規模バイオエネルギー コミュニティについて

東日本大震災による福島第一原発事故後の日本におけるエネルギー戦略の再構築と被災地のエネルギー戦略による復興の道筋を探るために、バイオエネルギー先進国のブラジルからの学びと応用の研究を進めている。本報は、その研究の一環であり、小規模バイオエネルギー生産を地域での持続可能な農業と地域振興の視点から実践されているブラジル・ミナス州南東部のピソーザ市のコミュニティを取り上げる。

牛乳協同組合と連携した バイオエタノール生産

ミナス・ジェライス州ピソーザ近郊で実施されている、コミュニティレベルでの小規模アルコール生産の基本的論理は、地域にある既存の牛乳協同組合との連携を通し、本協同組合の持つインフラを活用して実施することにある。ここでいう「論理」とは、遠隔地に分散している小規模な自作農家から牛乳を収集している牛乳収集用タンクが、同時にサトウキビを低発酵させたアルコールも収集するというシステムのことである。この複合システムにより、輸送コストが大幅に削減され、より生産の増加が促される。また、「協同組合のインフラを使用して処理する」という仕組みとは次のようである。牛乳を低温殺菌機で低温加熱する作業で

は、低温殺菌の機械は一日に数時間しか使用しないため、その空いている時間に、プレ・アルコール(35%)または低水準アルコール(80%)をエタノール(95%)に精留するためにその機械を使用する。さらに、この中核的な生産ユニットは、分配センターとしての機能も果たす。この制度を利用することにより、牛乳協同組合のメンバーは各自が生産したプレ・アルコールを、純度の高いバイオエタノールと交換して直接手に入れることができるメリットがある。これは、ガソリンスタンドでのバイオエタノールの価格よりも安く、協同組合に加盟する農家にとっては、副収入にもなる。ピソーザ連邦大学のジュアレ博士らの研究グループは、このような小規模エタノール生産の技術的および経済的な実行可能性とその意義について研究を進めてきている。そして、この研究グループ自体が小規模なバイオエタノール生産システムを構築してきた。

もう一つの別の小規模プロジェクトを紹介する。良質なサトウキビ発酵酒を生産できる

かどうかは、いくつかの技術の質によって決まる。生産プロセスにおいて蒸留による残留分を、プロセスの開始段階と最終段階の両方において分離する。蒸留酒生産者組合によるカシャーサ(サトウキビの蒸留酒)の残留物から生産できるアルコール燃料の生産的な経済的価値とその実施可能性について研究がなされてきた。研究の結果、蒸留酒生産者組合の生産過程から出る「ヘッド」と「テール」を原料とした燃料アルコール生産は、利益を十分に生み出す事業となり得ることが明らかとなった。サトウキビ蒸留酒生産の最初の一サイクルから得られる燃料アルコールーリットルの生産コストは約0.45ドルで、二番目の一サイクルでは0.3ドルであった。通常、ガソリンスタンドでは、この種のアルコールは一リットル当たりドルで販売されている。しかし、ブラジルでは、バイオ燃料の商品化は専門の生産業



小型バイオエタノール蒸留装置(移動式)
(ピソーザ連邦大学のジュアレ博士の実証実験)



小型バイオエタノール蒸留装置
(ピソーザ連邦大学のジュアレ博士所有の研究農場)



内ヶ崎万蔵
(日本大学生物資源科学部准教授)

ブラジルのアマゾン・モト・ホンダ社はマナウスに2輪車工場で世界初のフレックスエンジンを搭載したCG150のオートバイを生産し、世界初のバイオニアモデルとなっている(ホンダ社, 2009年)

者と販売業者に限定されており、一般市場での販売は難しい。そこで、生産されたバイオエタノールは、地元のタクシードライバー組合での自動車燃料として消費することの可能性について研究を進めた結果、このシステムは、関連するすべての関係者に利益があることが明らかになった。

コミュニティでの 実践と日本の課題

このように、サトウキビ蒸留酒の生産者組合による、蒸留酒生産過程から出る残渣の「ヘッド」と「テール」を有効活用したアルコール燃料生産については、その経済性と実行可能性が立証された。サトウキビ蒸留酒生産というブラジルの国策的産業における、バイオエネルギー生産を含んだゼロエミッションサイクルが、コミュニティレベルで可能であることが明らかとなった。サトウキビ蒸留酒の生産過程からの残留物を活用し副収入を生み出すことは、生産者にとって複合経営のための方法として評価できる。また、これらの複合生産コスト負担は組合員間での公平な分配で実現できる。さらに、需要サイドにタクシードライバー組合が参入することで、地域でのバイオエネルギーによる地産地消戦略が確立できることになる。このような、サトウキビ生産を核とした、地域レベル、コミュニティレベルでの蒸留酒+バイオエタノールの複合生産と消費者グループとの連携と協同によるシステムは、日本における適用可



ブラジルのAGCO社は世界初の混合燃料、バイオエタノール50%、バイオディーゼル50%のトラクタを開発生産、最終的には75%のバイオエタノールが可能である(AGCO, 2012年)

能性を示している。

日本の場合、このようなシステム普及のネックとなるのは、酒税法の問題やバイオエタノールを自由に使用した燃焼機械(フレックスエンジン)の開発と普及の課題である。ブラジルのように、地域でのコミュニティや協同組合単位での自由なバイオエネルギー生産と消費のシステムを、法的にも制度的にも技術的にも可能にしていくことが緊急に求められる。

日伯交流の促進 (移民110周年)

2018年は、日本人ブラジル移住110周年にあたる記念すべき年である。移住から110年、現在ではブラジル移住者の子孫は、160万人に上るとも言われ、海外最大の日系社会を築き、ブラジル国内でも高い評価を得ようになっている。

国際的な食糧危機に加えて、環境とエネルギーの危機の時代である今、ブラジルに求められるのは持続可能な農業である。そのなかで、セラードおよびアマゾン地域での環境保全のためには、国際的協力が不可

欠である。衛星によるアマゾンでの違法伐採と開発への監視システムの確立とあわせて、日系人によるアグロフォレストリー(森林多層農業)の普及などで日本の果たしていく役割は今後も大きい。

世界的な食のライフスタイルの変更も、地球規模の食料、環境、エネルギー危機の克服のためには不可欠となっている。ブラジルが世界の食糧庫としてより発展・開発していく以前に、食のあり方を変えること、大量なエネルギー消費をする経済、生活スタイルを変えることが、世界および日本に求められている。東京電力福島第一原発事故を教訓に、日本が安全で環境に優しいバイオエネルギー、クリーンエネルギーへの転換を求められるなかで、地球の反対側の大国ブラジルは近年急速な経済成長を進めている。とくにバイオエネルギー分野では世界先進国であり、特に実践的、政策・法制的な視点では日本を上回る最先端のモデル国である。今後はバイオエネルギー分野における日伯国際交流を展開し、これまで以上に技術開発協力の拡大を進めていくことが必要かつ極めて重要と考える。

日伯友好病院 医療スペシャリストによる ハイレベル地域診療

日伯友好病院の建設は、日本移民 80 年祭の中核事業として立案されたが、その設立趣意書において、「立派な医療施設を通じて、病苦に悩む多くの人達のお役に立ち、日伯友好親善の実をあげたいとの願いがこめられております。即ち日系人のためばかりでなく、私たちに今日の繁栄をもたらしてくれた養国ブラジルに、お報いしたいとの気持の盛り上がりで建設を促進させました。」とあるように日系社会のみを対象とするのではなく、ブラジル地域社会のためになる病院として構想されていた。この日伯友好病院は 1988 年に落成、開院したので、今年 2018 年で 30 周年を迎えることになるが、今日ではサンパウロにおける有力な一流総合病院の一つとして知られるようになっている。本稿では、この歴史と現状について簡潔に申し述べたい。

日伯友好病院の沿革

1984 年 1 月、国際協力事業団(当時)から旧工業移住センター用地が有償譲渡された時点から、この病院の建設準備が始まった。1985 年 6 月、病院建設委員会の結成総会が開催されたが、日本側は官民合わせた諸団体からの補助や寄付が行われ、ブラジル側は日系コロンビア(社会)が一体となって援助体制が確立されたのであった。こうした経緯を経て、

1986 年 6 月に着工、1988 年 6 月 18 日、移民 80 年祭の式典日に落成式

となったのである。開院は同年 9 月 19 日であった。ちなみに、工事費は 502 万ドル(日本政府助成金 1 億円含む)で、設置された最新鋭医療機器類の購入金額は 227 万ドルとなった。

周知の如く、当院の経営は、援協と略称される「サンパウロ日伯援護協会」が責任を有するが、援協とは、日本移民によって日系社会の福祉向上を図るべく設立された福祉団体、NPO(非営利団体)である。

開院時は、18 の診療科目数でスタートした。すなわち、内科、消化器科、外科、整形外科、小児科、産婦人科、脳神経科、成人病科、眼科、耳鼻咽喉科、皮膚科、泌尿器科、麻酔科、レントゲン科、臨床検査科、心臓外科、精神科、人間ドック、などで、病床数は 120 床であった。

地域診療と最新医療技術更新の現状

いうまでもなく医療の世界は、医学的な知見も医療機器類も日進月歩であり、当然ながら当院も継続的な投資・更新を行ってきている。医師や看護師の研修や学会参加はブラジル国内はもちろん海外でも行っており、日本の関係団体との交流も拡大してきている。また、医療機器についても更新・新たな投資・購入を実施してきた。

こうした改善努力の結果、現在の病床数は 243 床へ増床され、40 の診療科目を専門医がきめ細かく対応しており、病棟、看護室のほか ICU(集中治療室)も完備、救急救命センターは 24 時間体制である。追加された診療科目をいくつか列記すると、鍼灸法科、アレルギー科、内分泌科、内視鏡検査科、物理療

法科、言語療法科、放射線療法科、腎臓病科などである。また、診察・相談はポルトガル語でも日本語でも可能な、ニカ国語対応体制を維持しており、ポルトガル語に不自由な日本人・日系人が安心して来院できるよう配慮している。

病院の所在地がサンパウロ市バルケ・ノヴォ・ムンド地区なので、サンパウロ市北部や東部の住民はもちろん、隣のグアルーリョス市の住民にとっても通院しやすい、地域に根付いた地元病院となっている。現在の年間来院者数は、60 万人以上となっており、この 9 割以上が非日系のブラジル人となっていることからわかるように、地域医療機関として信用と実績を積み重ねてきたといえる。

医療機関としての評価・認定

ブラジルには医療サービス部門のための公的認定機関として ONA(ブラジル国家認定機構)という NGO 機関があるが、この機関による評価・通知表においては、トップレベルのカテゴリーを意味する「優秀レベル 3」を、当院は 2013 年度以降、継続して与えられている。すなわち、権威ある NGO 機関から、医療対応の安全性、倫理性、尊敬度が認知されたと考えている。

また、有力経済誌『Exame』の 2016 年度「ブラジル企業：最良・最大の 1,000 社」特集号において、健康関連部門では、ブラジルで最良の総合病院とみなされているアルベルト・アインシュタイン病院よりも高い評価・順位をいただいた。医療レベルばかりでなく病院経営の観点からも高い評価をいただいた訳であり、当院としては、この評価を裏切ることのないよう、引き続き医療機関としての責務を果たしていきたいと考える次第である。

(註：原文はポルトガル語、編集部訳)



天内ヴァルテル
(日伯友好病院院長)

＜特別寄稿＞

本物のサッカー少年育てる！ ジーコが始めた 20 回目の 「日伯友好カップ」

高島雄大(株式会社鹿島アントラーズ FC 育成部長)

ライブ放送するジーコ



リオ・デ・ジャネイロのヘクレイオにあるジーコサッカーセンター(Centro de Futebol ZICO)において 17 年 8 月末からほぼ 1 週間、第 20 回日伯友好カップが開催された。優れた少年チーム(主に中学生)を集めた大会には計 20 チームが参加。リオ州の名門クラブ、フラメンゴ、フルミネンセの他、リオグランデ・ド・スル州からグレミオ、サンパウロ州からサントスなどブラジルの各地から強豪チームが出場した。

日本からは各 J クラブの推薦選手で構成された J リーグ選抜、鹿島アントラーズ、アントラーズ・ノルテ、アントラーズ・つくばの 4 チームが参加した。予選リーグは 4 チームが 5 つのグループに分かれて総当たりのリーグ戦を行い、上位 8 チームによる決勝トーナメントが行われた。また、3 年ぶりの参加となった千葉県由市川トレセンは、17 年はブレイVENTとしてブラジルの 4 チームと親善試合に臨んだ。

試合を通して日本の指導者、選手たちが感じたのは、大会に出てくるブラジルチームの選手達がこの年代ですでにしっかりとサッカー選手になっているという事。個人の技術を戦術の中でどう活かすかを理解し、ゲームの中で表現ができる。ボールを奪いあう球際の厳しさ、ゴールを奪う、奪わせないという強い気持ちを持ち、勝負にこだわり、自分の対峙している相手に負けたくないという姿勢が伝わってくる。

それに対する日本の選手たちは、日本でやっていることがここでは通用しないという悔しさを身をもって感じていた。初戦からはなかなか力を出せなかった日本人選手達の表情が日に日に変わっていき、ブラジル人選手への対応も試合ごとに少しずつ出来るようになってきた。1 対 1 の勝負やゴールを守る、奪うところでの力強さが増した。相手も勝たなくてはならない状況で、必死になって向かってくる。そのようなプレッシャーがかかった中での戦いを多く積むことが、日本人選手たちの成長に繋がっていく。ここでの経験で得た基準が、血となり肉となり、今後に繋がっていくのを体感できる大会であった。

17 年の決勝はグレミオとフラメンゴとの間で行われ、アウエーのグレミオが延長で決めたゴールを守り、



1-0 で初優勝を飾った。20 回目を迎え、新しい試みとして予選リーグの 6 試合、決勝トーナメントの 5 試合の合計 11 試合を生中継で放送した。ジーコの FACEBOOK でも中継され、合計で約 200 万のアクセスがあった。日本チームの試合は 3 試合放送され、同時刻に日本において試合を見ることができるようになった。

大会会場であるジーコサッカーセンターは、1995 年に竣工した。以降、ジーコが日本代表監督になる 2002 年まで、日本の小学生から高校生までの選手が春休みと夏休みに個人で参加できるサッカーキャンプを行っていた。日伯友好カップは個人参加では体感できないブラジルの強豪チームとの試合を目的に 1998 年に創設された。

現在、この大会はブラジルでも認知されて多くのチームが参加し、将来頭角を現す選手も発掘されてきた。コリンチャンス FW ジョー、フラメンゴの若手 FW ヴィニシウス Jr. もこの大会に出場した。日本でも森本、柿谷、宇佐美、山口、井手口選手ら日本代表になった選手、鹿島アントラーズの遠藤、土居、鈴木選手も出場している。この大会がトップチームでプレー出来る選手達を見出せる舞台であることを示している。

また、この遠征にはもう一つの側面もある。リオに滞在する日本人スタッフとも、20 年間の長きに渡り共に仕事してきた。毎年チームが到着する前に、昨年よりも良い大会にしようと打ち合わせを行っている。これまでにジーコセンターへは約 2400 名の日本人選手が参加した。もちろん、上記のようにトップ選手として素晴らしい実績を上げている選手たちもいるが、ほとんどの選手はプロ選手になることができない。しかし、この年代に地球の反対側のブラジルに遠征することで、ピッチ内だけでなく市街観光や現地の食事など様々な交流を経験できる。一生に一度のブラジル遠征になる少年がほとんどであり、この遠征で何かを感じてもらい、一人の人間としても成長してもらえるようにしたい。

私は、1993 年より鹿島アントラーズで勤務している。入社後よりジーコと共に行動することも多く、たくさんの事を学ぶことができた。当時は日本にプロサッカーリーグはなく、選手としての心構えだけでなく、プロクラブの在り方、リーグの在り方など多くの事を伝えてくれた。私にとっては幕末の黒船来航と同じようなものであった。色々な話を聞きながら、噛み砕いて吸収して実行してきた。結果として鹿島アントラーズはこれまでに 19 回——のタイトルを獲得することができた。素晴らしいリーダーであるジーコに深く感謝したい。Muito obrigado!!

日伯友好病院正面
と病院のスタッフ



日伯少年チームの試合風景

リオ五輪レガシーと移民のレガシー 「東京五輪とブラジル移民 110周年へ向けて」



戸田和敬
(サンパウロ新聞記者)

2016年に開催されたリオデジャネイロ五輪から1年以上が経過し、五輪レガシー（遺産）の現状に注目が集まっている。2年後に迫る東京五輪を控える日本にとっても、リオの現状から目が離せなくなってきた。

リオ市を訪れたのは2016年11月中旬。五輪でメイン会場となった地区の一つ、バーハ・ダ・チジュッカ区にあるオリンピック公園に行ってみた。比較的綺麗に整備されているものの、天候の良い休日でも人の気配は殆どない。五輪後に4つの公立学校へと改築されることが話題になっていた同公園内のフューチャー・アリーナは何ひとつ手が加えられず、静かに佇んでいる。同公園内には、既に解体され、イベント会場として使用されている施設もある。近々カナダ発祥のエンターテインメント集団、シルク・デュ・ソレイユの公演会場に使用されるという。約1万8000人を収容可能だった選手村は、五輪後に分譲住宅として販売されているが、売れ行きは悪い。

リオ市西部のテオドロ地区では、陸軍の駐屯地を利用して、カヌーや競馬などの競技が行われた。その後も引き続き軍の施設として使用されているが、これはレガシーの有効活用とはほど遠い。他にも継続利用されている施設はあるが、マラカナン・スタジアムなどのサッカー競技場は元々あった施設を増改築したものだ。

セルジオ・カブラル元州知事が収監されるなど、汚職・収賄の捜査が進行中のリオ州では、五輪レガシーの維持に予算と時間を割く力があるとは思えない。リオ五輪が市民に残した遺産に、開幕直前に完成した同市メトロの南方延伸とBRT（専用道路走行のバス）がある。しかし、同市在住の日系人（男性）によると「貧困層には関係のない話。格差が広がるのでは」と懸念している。

2018年移民110周年を迎える日系社会にとって重要なのは、リオ五輪のレガシーではなく、移民のレガシーである。ブラジル各地に移民レガシーと呼べるものがある。移民の歴



静かに佇むフューチャー・アリーナ

史を知るために、日本からの来訪者が必ず訪れる場所がある。サンパウロ市イピラプエラ公園内の日本移民開拓先没者慰霊碑とサンパウロ市リベルダーデ区にあるブラジル日本移民史料館である。しかし、同移民史料館は2018年中は改修工事で閉鎖されることが決まっており、110周年委員の中には「日本から多くの人が来る年に、なぜ工事をするのか」と疑問視する人もいる。

サンパウロ州レジストロ市に、1913年にできた最古の入植地・桂移住地の記録を集めた「日本移民史料館」の移転も11月初旬に調印式が行われ、正式に発表された。同史料館はKKKK（海外興行株式会社）の精米所・倉庫跡跡地。関係者からは移転に反対する人もいるなど、「建物から全てが博物館だった」と移転を惜しむ声も強い。

移民レガシーの中には徳川第11代将軍・家斉が亡くなった時に建立された由緒正しき石灯籠が東叡山寛永寺から東京都を通してブラジル日系社会に寄贈された例など、両国の歴史の中で重要な日伯交流史の資料になるものも少なくない。当時の資料を東京都・政策企画局外務部事業課に問い合わせたところ、「東京都では当時の資料は確認できませんでした」との回答があった。移民のレガシーが日本では、寄贈した記録さえ残っていないほど軽視されていることに残念な思いがした。

日本国内では東京五輪ムードが高まり、そろそろ開幕までの日も話題になり始めているようだが、会場の建設や合宿地の誘致合戦など、課題は山積みしている。五輪閉幕後は、リオの二の舞にならないことを願うばかりだ。

1964年、日本は東京五輪を成功させ、高度経済成長の起爆剤にして大きく飛躍した。一方、ブラジルは「50年を5年で」を掲げて邁進していたクビシェツキ政権を継承したゴラル政権がクーデターで倒れ、軍事政権に突入した。両国の歩みを大きく左右した年だった。今回の東京五輪を生かすためには、五輪レガシーの事前構想をしっかりと練ることだ。

五輪がリオから東京へ移る中で、2018年の移民110周年は五輪移行の中間地点に当たる。この転換期に、五輪レガシーだけでなく、移民のレガシーへも目を向けて欲しい。日伯交流には、常に移民の存在が大きな役割を演じて来た。各周年事業を行ってきた日系社会は、日本文化の紹介に貢献してきた。移民レガシーは日伯交流史そのものである。

「五輪レガシーも管理できないブラジルが、移民のレガシーを管理できるとは思えない」というリオ市在住男性の言葉に、「だからこそ、日系社会で保護・記録していく必要がある」と指摘したい。



新日鐵住金

しんにつてつすみきん

鉄の宝庫ブラジルとの絆

2012年10月に新日本製鐵（株）と住友金属工業（株）の統合により発足した新日鐵住金株式会社は、製鉄事業を中心にエンジニアリング、化学、新素材、システムソリューションなどの事業を日本国内外で展開している。

当社とブラジルとの関係は、1955年のヴァーレ社鉄鉱石の日本向け初出荷に遡り、以来1958年のウジミナス社への出資・建設、2007年のパローレック&スミトモ・トゥーボス・ド・ブラジル（VSB）社の設立を経て、現在ではエンジニアを中心に当社からのブラジル派遣者は60名を超える規模となっている。

ブラジル事務所開設

旧新日本製鐵がリオ・デ・ジャネイロ市にブラジル法人を開設した1972年は所謂ブラジルの奇跡によりブラジルの経済、工業生産が目覚ましく成長した時代であった。

その様な時代背景の中で、①鉄鋼業の拡大がブラジルの国家プロジェクトとして計画されていた中でのエンジニアリング受注機会の模索（日本からの鉄鋼関連技術・プラント輸出、機械プラントの現地生産など）、②日本の高度経済成長期を支える鉄鉱石資源の供給元の多角化の観点からのブラジルの良質な鉄鉱石資源の開発（鉄道、港湾などの輸送インフラを含む）、③ウジミナス社の経営サポート、④ブラジル鉄鋼業の鋼材輸出競争力の調査などが開設目的として挙げられている。

鉄鉱石資源開発

ブラジルの鉄鉱石資源の開発は、ヴァーレ社と、当社を中心とした日本鉄鋼業との協力関係に支えられて発展してきたと言っても過言ではない。

日本向け出荷を前提とした大型船の受入れが可能なエスプリット・サント州ヴィトリア市ツパロン港の新設（1966年）、日本の全高炉メーカーとヴァーレ社との鉄鉱石ベレットJVであるニプラスコ社の設立（1974年）、世界最大かつ最良質のパラ州カラジャス鉄鉱山の開発（1985年出荷開始）など、何れのプロジェクトもブラジル人と日本人、サプライヤーとユーザーという立場の違いと幾多の困難を乗り越えて、多くの関係者のご協力の下、未開の地において鉄鉱石資源の開発を実現し、今日に至っている。

ウジミナス社における挑戦

ウジミナス社と当社の歴史は、鉄鉱石資源が豊富なミナ

能勢大伸
(南米新日鐵住金 社長)



ス・ジェライス州に一貫製鉄所を建設するという計画への協力を日本政府がブラジル政府から要請されたことに始まる。1957年6月3日に日伯両政府の間で「日伯合併製鉄会社設立に関する協定（堀越・ラナリー協定）」が締結されているが、この2017年には60周年を迎え、ペロホリゾンテやイパチングで盛大な祝典が開催された。

1958年にウジミナス社が設立されて以降、当時は無人の荒野であったイパチングに当社の前身である八幡製鐵が中心となって最初の数年間だけでも600人以上の技術者を送り込み、困難を極めた製鉄所の建設、操業支援などに注力してきた。

その後60年に及ぶ技術協力、高級鋼製造に必要な最先端技術のライセンス供与などを通じ、当社の有する経営資源を惜しみなくウジミナス社に投入した結果、今日、ウジミナス社はラテンアメリカ有数の高い技術力を誇る製鉄会社に成長。ここ数年のブラジル経済の低迷に伴い厳しい収益状況にあったウジミナス社だが、2017年に入り明るい兆しが見え始めてきている。

今後とも同社の利益を最優先に考えて、引き続き貢献していく所存である。

VSB社における挑戦

2016年にフランスのパローレック社のブラジルでの鋼管製造事業と前述のVSB社の事業統合を行い、新生VSB（パローレック・ソルソンス・トゥーブラレス・ド・ブラジル）社が誕生した。現在は石油開発・生産の現場で使われる油井管の市況低迷により継目無し鋼管の販売で苦戦を余儀なくされているが、コスト競争力の強化等に注力し、収益改善に邁進している。

ブラジルとの絆の更なる強化

変化の激しい事業環境をしっかりと見据え、日伯両国にどういう貢献ができるのかを自らに問いかけながら、将来に向けた事業基盤の強化を着実に推進していくことが、現在のブラジル派遣者60名の責務であると考えている。鉄鋼業を中核事業とする当社にとって、良質な鉄鉱石の一大産出国であるブラジルの重要性はいささかも揺らぐものではない。輝ける碧き空の下で、その絆を更に強固なものにしていきたい。



ウジミナス社イパチング製鉄所
第1高炉火入れ式（1962年）

知的財産権と税務関係



ホベルト・カラペト
(Licks Attorneys.
ブラジル弁護士)

連載

ビジネス
法務の肝

権利行使には税務義務

ブラジルは、税制が非常に複雑な国として知られている。また、ブラジルの税金は大まかに「連邦税」、「州税」、「市税」に区分される。各行政機関（連邦政府、州政府、市）が各種税金の課税限度、各々の税法の一般規定を定めている。税の種類も多数があり、また、税ではないものの、社会負担金も存在し、それも徴収されることもある。その上、税金の適用に対して、税務関連紛争も多く、場合によって適切に税金の適用性を見込むことが難しい場合がある。

当然、ブラジルにおいて、技術および知的財産の利用から税制に関する義務が生じることがある。ブラジルでは、税制は州そして市町村によって変わることがあるので、詳細な説明が困難であり、一般的に制度を紹介することしかできない。日本企業が直接的にブラジルで特許権を実施する機会が少ないため、通常、知的財産に関する活動はたとえば特許や商標などのライセンス契約およびノウハウ契約ということになる。そのような活動なら、一般的に下記の税金が課税される可能性がある。

- ◆源泉徴収税 (IRRF)：給与・報酬・利子・配当・使用料等の支払者が、それらを支払う際に所得税等の税金を差し引いて、それを連邦政府に納付する制度である。
- ◆特定財源負担金 (CIDE)：特定した活動に対して課税される税であり、連邦政府に納付する税である。納付された資金はブラジルの開発促進に利用される。
- ◆サービス税 (ISS)：役務提供を行う法人や個人独立業者の受取対価に対し、サービス提供者の所在する市が課税、市町村（そして首都のブラジリア）に納付するものである。
- ◆社会統合基金 (PIS)／公務員厚生年金 (PASEP)：失業保険や金銭的援助の財源として、社会統合基金は民間企業から、公務員厚生年金は連邦政府、州政府、市や公共団体から、それぞれ徴収される。
- ◆金融取引税 (IOF)：金融取引に対する課税されるもので、連邦政府に納付する制度である。税率は金融取引の種類により異なり、頻繁に変更される。
- ◆社会保険融資負担金 (COFINS)：社会保障や医療、福祉の財源に充てられ、すべてのサービスや商品の総売上高に対して課せられる。

ライセンスに関わる税

日本企業はブラジルにおいて有効な特許権、意匠権および商標権を持っており、ブラジルの企業（子会社を含め）に対してライセンスを結んだ場合、その契約からなるロイヤルティーを外国に送金する際に、送金行為として金

額に対して下記のような形式で課税される。

- ・源泉徴収税 (IRRF)：通常 15%だが、日伯租税条約により、12.5%
- ・特定財源負担金 (CIDE)：10%
- ・金融取引税 (IOF)：0.38%
- ・サービス税 (ISS)：2%～5% (商標使用許諾の場合のみ)登録されていない権利に関する技術移転、つまり、ノウハウをブラジル企業に移転するための契約についてロイヤルティーを支払う際に、下記のように課税される。また、技術支援に関する契約についてもそのサービスに対する対価に対して同じく下記のように課税される。
- ・源泉徴収税 (IRRF)：通常 15%だが、日伯租税条約により、12.5%
- ・特定財源負担金 (CIDE)：10%
- ・金融取引税 (IOF)：0.38%
- ・サービス税 (ISS)：2%～5%
- ・社会統合基金 (PIS)／公務員厚生年金 (PASEP)：1.65%
- ・社会保険融資負担金 (COFINS)：7.6%

その他の注意点

注意すべき点として、ブラジルと日本は、重複課税を避けるための日伯租税条約を 1967 年に締結しており、同条約に基づく手続きが重要となる。ブラジルでは、ロイヤルティー等の送金時に同条約に基づく 12.5%の所得税が供与者の所得から源泉徴収されるので、その支払い（納税）証明書と、租税条約上の届け出書に証明を得たものを日本に送付する必要がある。

もう一つの注意点として、ブラジルでは、ブラジル特許庁 (INPI) に対して産業財産権に関する契約を登録することができる。ブラジル特許庁に対する契約の登録は当事者間において有効性の要件になっていないものの、登録をすることによっていくつかの効果が得られる。まず、登録をすることで知的財産に関する契約からなるロイヤルティーの国外送金が可能になる。そして、税金に関することでは、ブラジル国内企業は登録された契約からなるロイヤルティーを支払った後で、その一部を自分の法人所得税から税控除を受けることができる。関連会社の場合だと、商標ライセンス契約に基づくロイヤルティー支払いによる控除の上限は売上高の 1%、また、特許ライセンス及び技術移転のロイヤルティー支払いによる控除の上限は 5%で、更に、業種により細かく上限が設定されている。日本にある本社とブラジル子会社の経営の両方を考えながら、そのような制度を利用することが有利といえる。

高税率で複雑なブラジルの消費課税 (その2)

都築慎一
(ブラジル公認会計士、
トーマツアドバイザー)



今回は、ブラジル消費課税のあらましについて説明した。次に消費に対する課税の簡単な計算例を示しておく。個人が、直接製造者から購入した商品で、商品流通税 (ICMS)、工業製品税 (IPI)、社会負担金 (PIS/COFINS) が、9.25% で課税されたとした場合の商品購入支払額中の消費課税は以下のようになる。

(1) 税を除く本体価額	1,000
(2) ICMS	279.07 (5) × 18%
(3) PIS/COFINS	130.37 {(1)+(2)+(3)} × 9.25%
(4) IPI	140.94 {(1)+(2)+(3)} × 10%
(5) 商品販売価格	1,550.38

(税金を含んだ額に対して更に税金がオンされることに注意。税金合計額 550.38 だけで、元値 1,000 の 50%以上になっている高税率)

さて、なぜこのように消費に対する課税は複雑になってしまったのだろうか。私見ではあるが、3つの大きな理由があげられよう。

- 付加価値税というルールは同じでも連邦と州の消費課税ルールが、かなり異なっており、特に州税は、州間の企業誘致などもあり、共通ルールはあっても、実務上は州ごとにルールが異なる部分がかなりあること。そのため、州をまたいだ取引に対しては、税の配分ルールの調整の問題が起きている
- 多くの州では付加価値税（多段階消費課税）を基本的ルールにしながら、末端の取引では、税務伝票を発行しないような脱税行為が多いので、製造段階で税金をすべて前取りするような単段階消費課税制度を多くの製品に適用している。
- 政府の態度が、税は民間の経済活動に中立であるべきという基本ルールを逸脱している。民間の経済活動を促進するために、税の面から干渉することをするを前提として、その時の経済環境を鑑み、特定の業界の製品に対し、例外規定を適時公布している。その結果税規定の変更も頻繁に行われ、あまりに例外規定が多くなり、税法の改正に納税者が追い付いていけないような環境となっているなどである。

税はシンプルであることが大事であるという教訓が生かされていない典型的な税制度と言えるかもしれない。

ブラジルへの投資の検討をする時に、マイナスの要因として、よく言われるブラジルコストという言葉がある。いくつかある中で、税制度にたいする問題はよく議論される。売り上げの多少にかかわらず、自分で、税務の処理をしようとすると税法のフォロー、提出書類などに、ブラジルでは何人も

の実務経験者を雇わなければならないことで固定経費が増える。また法律通りに処理していたら、間違った処理になっていたなどで罰金を科せられるリスクが多いなど、税に関する企業の不満は多い。

政府もこのような問題は認識しており、消費課税を連邦政府が一本化しようとする議論は以前からあるが、連邦政府に税収が集中してしまうことに対する州側の危惧や、各州の税収の配分をめぐる政治問題上の理由で、結論はいつも先送りされているのが現状である。

＜重要ニュース＞

ブラジル駐在員に対する本社給与立替額のブラジル子会社への請求

COSIT (連邦税租税調整局) は、2017 年 8 月 31 日付け官報の 378 号で、ブラジル駐在員に対する本社給与立替額のブラジル子会社への請求に関する税務上の取り扱いについて、新たに見解を表明した。内容の骨子は 給与の本社立替額の返済は、本社の収益ではなく、単なる費用の回収であることから、源泉徴収は行われず、役務提供対価払いに課せられる連邦税の PIS/COFINS などの課税も行われない。また、インボイスを発行して請求されなければならないことや、企業の必要経費であるという前提で、税務上の費用としての控除を認めるといったものである。

ブラジル駐在員の本社が負担した給与について、日本側では本来ブラジル子会社が負担すべき金額であるとして、立替払いとして処理し、後日ブラジル子会社に返還を求めようとする企業も多い。ただそのブラジル子会社からの返還が可能か疑問となっていた。今までは、ブラジルでは、海外の本社給与立替額の返還についてはっきりとした規定はなく、為替管理法上の送金名目が明記されていないことから、実務上「その他」という名目を使用し、送金が行われていたようである。「その他」という名目では、子会社からの親会社への送金は、親会社による役務提供の対価支払いと同様に扱われ、法人税法上、源泉徴収を行うことになっていた。また、役務提供対価払いに関わる PIS/COFIN や ISS などの間接税も課せられていたため、送金コストが高くなり、多くの企業は回収をあきらめていた。

従って今回の当局の回答は、朗報といえよう。注意点としては、国税局の見解は、納税者からの質問に対する回答として官報に公示しているため、質問の特定の事象について回答しているのであって、すべての立替金について規定しているわけではなく、給与や報酬に限った見解となっていることである。ただネックとなっていた税金問題が解決したことで、本社給与の立替額の回収は、今後行いやすくなるだろう。

さようなら、私の美しい日本

ドナテッラ・ナティリ ファラーニ（ブラジル大学文学部日本文学プログラム教授）



海外での日本イメージが、どれほど日本文学の翻訳の影響によって創造されているか、おそらく一般の人は想像できないことだろう。にもかかわらず外国における日本の美学的イメージは、確かに文学の中における特異な美意識と優雅さの関係や、好色性と儀礼主義などが総合されて文学作品に込められていて、それらが多くを負っているのである。私はイタリアで生まれて、幼い頃から本が大好きで、熱心な読者であった父から多くの本をもらった。父のおかげで、有名な童話文学からイタリアの文豪まで読んだということだけではなく、文学の世界に導かれ、自らの新たな人生の可能性と美意識をも育まれてきたように思う。子供の頃、なかでも一番印象的だった作品は、十四世紀のイタリア商人マルコ・ポーロの「東方見聞録」であり、これは私にとって宿命的な作品となった。実際に数年後、大学入学の時期になった際に、ローマ大学の東洋学部を選ぶことになった。

80年代ごろのイタリアは、日本語を学ぶ学生はまだ少なかったが、日本文学の翻訳事情は極めて活発で、須賀敦子を筆頭とする先駆的な取り組みにより日本語からの直訳による主要な作品が次々と刊行されていた。谷崎潤一郎、川端康成、永井荷風のような偶像化された作家だけではなく、泉鏡花、石川淳など特異ともいえる作品もイタリア語で読むことができた。また、その後、日本のポップカルチャーのブームに従って、イタリアでは村上春樹や吉本ばななという若手作家がすこぶる人気となり、勢い良く新訳が発行されたのだ。しかし、私が大学生時代に初めてイタリア語で読んで感激したのは「源氏物語」であった。「源氏物語」を読んで何にそれほど惹かれていたかと具体的にいうと、もちろん、千年前の日本にこれほど洗練された社会があったのかと感心し、物語の登場人物に魅了されたこともあったと思うが、とりわけ、何よりもこの作品のなかで描かれている美意識の世界に大きな感心を抱いた。当然、西洋の文学にも美が現われているが、「源氏物語」のなかでは、ルックスの美しさより女性の服装や筆跡などが美しいかどうかが重要で、登場人物の行動さえ道徳的に判断するではなく、優雅なものとして扱われている。つまり、日本の古典文学は、美がすべてなのだ。また、「源氏物語」における人物の美的な感性は日本文化の真随であり、後世の日本人に多大なる影響を及ぼしていることがわかって来た。

現に、かれこれ約千年経ってから、川端康成から円地文子、大庭みな子までのような有名な戦後作家を読んでみれば、古典文学の不変の美の世界そのものが引き継がれているとしばしば感じられる。1968年に川端康成はノーベル文学賞受賞記念講演として「美しい日本の私」というスピーチのなかで、日本の心、日本の伝説文化の真随を伝えることで、そこに連なる自身の文学の本質と源泉を語った。特に川

端康成の「雪国」「美しさと哀しさ」「山の音」などの多く小説の魅力は圧倒的である。「もののあわれ」という平安時代の王朝文学にある美的な理念で溢れている。

さて、私は大学卒業後に文科省の奨学金を受けて、二年間の留学のために来日し、文学研究に没頭する機会に恵まれた。その際に得た、太古の昔にまでさかのぼる日本人の美的興味が、現在も日本人の生活の中でどれほど重要な役割を果たしているかを悟ったのである。特に、明治大学大学院で大岡信と言う偉大な詩人から古典文学の教えを受けたおかげで、千年前に書かれた物語を読む機会を得て、いかに日本人が美に没頭して生きてきたかがはっきりと分かった。また、日本に住むことで、美的な興味は上層階級から庶民まで広がっていることを周囲の生活から窺うことができた。古から今まで変わることなく桜の季節がくると日本中で個人やら集団やらで盛りの花の名所へと繰り出してゆくのだ。日常生活の中でも、にぎやかな都会の家や狭いレストランのどこか一隅には、伝統的美意識を象徴する何らかの季節の物や優雅さを感じられるものを見つけることができるのである。これは私が魅了される日本の一面である。

ところで、20年前に、私は日本でブラジルの外交官である夫と出会って、ブラジルに渡った。私にとっては、まさに新しい土地での生活は違和感を感じるが多かった。しかし、不思議なことに、かつて多くの日本人が入植した移民の地である国だからこそ、日本の文化の足跡もここそこに現れていることが日常的に感じられる。こういった環境で、自分の日本文学に対する好きせぬ興味が消えることなく、むしろ深まり、ついに日本文学の翻訳の仕事に取りかかりながら、大学の日本文学の先生になった。

はたして五年前に久々に家族で日本に戻る機会に巡り合った。運命だと思った。いや、運命というより、私には奇跡だったといえるだろう。再び、日本文学研究に身を捧げられる機会に恵まれ、大好きな作家の中で特別な位置を占めている大庭みな子のご遺族と親交を結ぶことができたおかげで、彼女の作品をより深く読むことができたり、早稲田大学大学院のゼミで現代文学の研究をして活発な意見を交わしたりしながら、日本文学の新たな見方や知識を身につけた。また、日本文学は現在、世界文学の一員になっているが、それが意味することは日本的でなくなったというわけではなく、日本文学の持つ固有性はそのまま維持されながら視野がひろがったということができる。世界における日本の重要な役割を振り返り、それを自覚して、海外において日本のもつ独特な美しいイメージが伝わることを願っている。

私はしばらくブラジルに帰国するのだが、心の中に愛しい友人や多くの温かな思い出をずっと抱きながら、美しい日本の魂を紹介し続けようと思っている。



世界の市民

皆様ご存じのように日本の出生率は下がってきている。この国で生活している私たち女性は、この数字に責任がある。女性、勤労者、母親という三役を一人でこなすことは容易ではない。しかしながら、過去を振り返るならば、ブラジルに移住した私たちの祖母たちにとっては、この重責はもっと厳しいものであったに違いない。

夫の夢に付き合って移民船に乗り込んだ日本人女性たちは、ブラジルで子供を産み、大多数の移民たちが従事した仕事、すなわち農業の現場でも手伝ったのだ。

前述した女性にとっての三つの役割については、今日こそ改めて再考しなければならないと思うのである。それは、子供を産む時ばかりでなく、養子を取るという判断をする場面でも、私たち女性こそが夫ないしパートナーの決断に決定的な影響を与える、ということだ。古くからいわれていることだが、父親ないし母親であるということは、赤ちゃ



羽山ネイデ
(在日ブラジル商工会議所機関誌「ブラジル」編集長)

んが生まれた時ばかりでなく、長年にわたって子供を育てるとの決断を下す時でも、だ。

幸いなことに、ノーベル文学賞を受賞したポルトガル人作家ジョセ・サラマゴが、息子とは何か、について素敵な定義をしている。「息子とは、①私たち以外の誰かにどう愛情を注いだらいいか、②私たちのどうしようもないウィークポイントをどうやって克服して弱点を長所に転換させるか、③どうやって勇気をだすか、という三つの命題についての特別インテンシブ・コース講習のために私たちに貸与してくれた、一人の人間存在である」と。

息子を育てる、世界のための一市民となる息子を育てる、とは、なんともチャレンジングなことであるが、心の安寧をもたらす行為であり、何人にとっても人生における修練なのである。

ジャーナリストの旅路

あの笑顔と活気は忘れない

新聞社の特派員としてメキシコ市を拠点にラテンアメリカを取材したのは1990年から94年までの5年間だった。そのころのブラジルは年率2000%超（93年末）という信じられないインフレの嵐が吹き荒れていた。お金の価値が毎日減る社会で人々の生活はいかにして成り立つのか。93年7月、連載記事を書こうとサンパウロの街を歩き回ったのを思い出す。

驚きばかりだった。例えば、自動販売機が存在しない。値段がすぐに上がるから機械の対応が追い付かないのだ。例えば、電気製品を買って3カ月の分割払いにする。支払い総額は一回払いより3割以上ふくらむが、それよりインフレ率が高くなれば実質値引きとなる。例えば、7日後の日付けの小切手でガソリンを買う。1日1%値上がりすれば1週間後には7%の得となる。人々はそんな計算を毎日続け、インフレ文化と共存していた。

つてを探して5人暮らしの家を訪ねた。マリアさんはオフィスビルの清掃で法定最低賃金の460万クルゼイロ（約7500円）の月収がある。給料が出るとすぐにコメ、豆、プロパンガス、通勤バスの切符といった必需品を買い込む。現金をモノに換えるのが生活防衛の

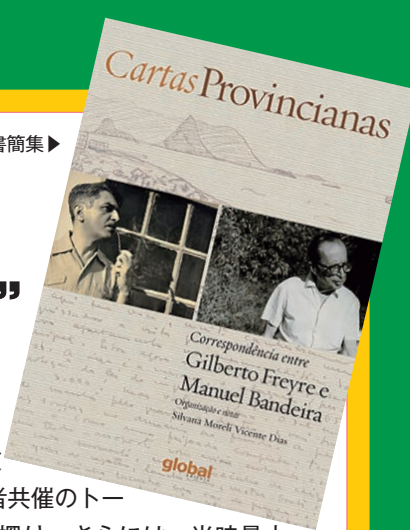
中井良則

(1975年毎日新聞入社。外信部長、
論説委員、現在は海外日系人協会常務理事)

第一歩なのだ。もうすぐ長女が結婚する。「花嫁衣裳をどう工面するか、頭が痛い」と言いながら、日本人記者を歓待してくれた。

四半世紀たってもブラジルの人たちの笑顔と活気と自信は忘れられない。経済も苦しかったが、政治危機も深刻だった。92年にはコロール大統領の弾劾手続きが議会で進み、結局、大統領は辞任した。下院が弾劾裁判開始を決めた時、ブラジリアの議会前広場で喜び、抱き合う人々の中に私もいた。「最高権力者の不正に我々は民主的なルールで闘っているんだ」と下院議員は話しかけてきた。外交官は「新聞は調査報道で不正を追及した。国民は整然と抗議デモを行い暴動にはならない。議会は党派を超え大統領の汚職を調べる。民主主義の成長を示す驚くべきことだ」と解説した。自信満々で高揚感に満ちていた。

2016年も人々は同じように秩序だった行動で、腐敗したルセフ大統領を倒したように見える。権力者の不正や疑惑に対するいまの日本人のしらけた反応を見ると、民主主義を信じるブラジルの人々の熱気がまぶしい。



トーマス・マンとブラジル 亡命先の米国で抱いた“望郷の念”

岸和田仁（『ブラジル特報』編集人）

ドイツの文豪トーマス・マン(1875-1955)とブラジル。いくら連想ゲームを頭の中で展開しても、全く関係がないように見える。マンはブラジルを訪問したことも一回もなければ、彼の小説やエッセイのなかにもブラジルなぞ登場しないからだ。が、両者の間には実は浅からぬ因縁があるのだ。

ナチスと対決したマンは、1936年には政治亡命を声明、亡命先として選択した米国では、まず東部のプリンストンに居を構え、1941年からはロサンジェルス郊外のパシフィック・パリセイズに移住した。彼のような政治亡命者を受け入れてくれた米国に終生感謝していたマンは、ドイツ降伏(1945年5月8日)から間もない5月29日、ワシントンの国会図書館講堂で『ドイツとドイツ人』と題する講演を行ったが、このなかで、米国のことを「外来の客に対して寛大な、この世界の都、人種的民族宇宙」と表現していた。

が、時代は急変、対ナチス連合は崩壊し冷戦構造に突入していく。マッカーシズム(赤狩り旋風)に追い立てられ、この「寛大な」米国を離れざるを得なくなって、スイスへ再移住したのが1954年であった。

こうした激動の1940年代末、カリフォルニアで苦悩の日々を過ごしていた、まさにそんな時、ドイツの文豪がブラジルに“望郷の念”を抱くことになるのだ。

その直接の要因は、招聘されてブラジル訪問できる可能性が出てきたからであるが、間接的には、彼の血統が関係してくるのだ。

ここで登場するのが、社会人類学者ジルベルト・フレイレ(1900-1987)である。『大邸宅と奴隷小屋』(初版1933年)によってブラジル社会論を革新し、社会史研究に新地平を開拓中であったフレイレは、1947年10月31日、Diario de Noticias紙に「トーマス・マン、ブラジル女性の息子」を寄稿している。

この記事がドイツ語に翻訳されてマンの手元に届けられたのが、1947年の年末だが、それを読んだトーマス・マンは感激し、ブラジル在住の知人(在サンパウロ・オーストリア領事)に「ブラジルが私を招待してくれるのであれば、喜んで行きたい、本当に嬉しい話だ」という趣旨の手紙を送ったのだ。

こうした経緯を知らされたフレイレは、マン招聘プロジェクトを一人で企画し行

動し始める。まず外務省や文学アカデミーに働きかけ、両者共催のトーマス・マン講演会の可能性を探り、さらには、当時最大手のメディアグループDiarios Associadosにも働きかけたのだ。ところが、誰もが無関心を装い、結局、誰一人として動かなかった。これは間違いなく、当時の社会情勢、すなわち米国における赤狩り旋風を忖度して、「マンは親共 Kommunists=危険人物だから、ブラジルに入国させるべきでない」という“無難な”判断をブラジルの関係者が下したからだろう。こうしてマンがブラジルを訪問する機会は失われてしまった。

というエピソードには背景というか前段がある。ブラジルの文芸関係者には広く知られていることだが、マンの母親Julia da Silva Bruhns(1851-1923)が、パラチ生まれのブラジル人(父親はドイツ人、母親はブラジル人)であったというファクトだ。彼女は、血統的には、ドイツ人、ポルトガル人、先住インディオの混血であり、それ故にトーマス・マンも自分の母親を「ポルトガル・クレオール系ブラジル人」と記していた。彼のナチズム批判というかナチスへの嫌悪感の根幹は、右翼独裁主義への不寛容にあるが、ナチスの優生思想・アーリア純血主義に対して“自分の体内の血が騒いだ”と解釈しても的外れではないだろうと筆者には思われるのだ。

歴史にイフを言い出しても詮無きことだが、亡命先の米国で、自分の母親のルーツであるブラジルへの“望郷の念”を育てていたと思われるマンが、もしブラジルを訪問して、最低1か月くらい各地で見聞を広めていたら、どんな感想を抱いていただろうか。彼の「ブラジル紀行」を読んでみたかった、マンのブラジル評価はどうなっていただろうか、『未来の国ブラジル』でブラジルを過大評価したツヴァイク(ユダヤ系オーストリア人作家)とはどう違う評価をしていたか、母親の生まれ故郷パラチの風景に“精神的サウダージ”を抱いたのではないか、等々、知りたかった、聞きたかった、と勝手に想像してしまうのは筆者だけではあるまい。

ちなみに、上述したエピソードが明らかになったのは、今年(2017年)5月に刊行された、詩人マヌエル・バンデイル(1886～1968)とフレイレとの間の往復書簡集『Cartas Provincianas』のおかげだ。この労作には、1925年から1966年までの40年間に交わされた68通の書簡が収録されており、1948年1月22日付けの、フレイレからバンデイルあて書簡にこの辺の経緯が詳しく記されているからだ。



トーマス・マンの両親

2017年第3四半期のGDP成長率

IBGE(ブラジル地理統計院)の発表によれば、2017年第3四半期のGDP伸び率は前期比プラス0.1%、前年同期比ではプラス1.4%であった。部門別では、農畜産業は前期比マイナス3.01%、前年同期比プラス9.1%、製造業は前期比プラス0.8%、前年同期比プラス0.4%、サービス業は前期比プラス0.6%、前年同期比プラス1.0%、であった。

こうした数値から、伸び率は微増レベルだが、はっきりと回復サイクルに入ったというのが、経済関係者の大方の見方である。

11月までの累計新車販売数

Fenabrave(全国自動車販売業者連盟)の発表によれば、2017年11月のバス・トラックを含む新車販売数は20.4万台で、前年同月比でプラス14.63%となった。

1月から11月までの累計販売数は203万台で、前年同期比9.8%の増加となった。

ブラジルによる電子査証発給措置(正式発表)

ブラジル外務省は、11月21日付プレスリリースにて、電子査証導入を正式に発表した。概要以下のとおり。

1. 外務省は、本日、豪州、カナダ、米国及び日本向けに「電子査証プログラム(E-VISA)」を開始した。
2. これら4ヶ国は、ブラジル在外公館における査証申請のうち、観光査証で63.74%、商用査証で58.15%を占める。
3. 申請者は、ウェブサイト(www.vfsglobal.com/brazil-evisa)か、携帯電話やタブレット端末よりアプリをインストールして申請を行い、電子ビザのハードコピーまたはデジタル画像を航空会社に提示する(各領事館での今までの申請も継続される)。
4. 電子査証は40米ドルで2年間有効となり、現在の査証手数料より大幅に安価となる。
5. 電子査証の運用開始時期は、豪州人向けが2017年11月21日、日本人向けが2018年1月11日、カナダ人向けが1月18日、米国人向けが1月25日の予定である。

ブラジル乳製品対日輸出再開(ブラジル農務省発表)

11月3日、ブラジル農務省は、ブラジルの牛乳・乳製品の対日輸出を再開する旨発表した。概要以下のとおり。

1. 約2年間の交渉の末、国際衛生証明書を取得すること

が承認され、ブラジルの牛乳及び乳製品の対日輸出を再開することとなった。

本件は、11月1日付けで在京ブラジル大使館を通じて公式にブラジル政府に伝えられた。

本乳製品等の輸出は、口蹄疫ワクチン接種の有無に関わらず、病気の発生していない地域(清浄地域)からの輸出が可能となるもの。

ブラジル・中国経済関係(中国によるファンドの設立)

11月6日、ヴァロール・エコノミコ紙は、中国がブラジルにおけるプロジェクトをファイナンスするための30億ドル規模の新たなファンドを開設すると報じている。概要以下の通り。

1. BNDES(経済社会開発銀行)の資金が不足し、国内投資のための融資が後退する中、中国がブラジル市場の平均を下回る利率で資金調達ができる選択肢として浮上した。中国政府と中国華陽経貿集团有限公司は、ブラジルでのプロジェクト又は中国に事業を拡大することに関心のある国内企業向けの新たなファンドを通じて30億ドルを使用可能にする。
2. ブラジル中国国際発展商会(CCDIBC)の胡忠偉(Fabio Fu)会長は、今年にも契約を結ぶことを期待しており、インフラ・物流、土木建設、アグリビジネス、PPP、公共コンセッション、テクノロジー、スタートアップ、電気自動車・トラック生産、エネルギー(太陽光、風力、水力、廃棄物処理工場、石油・ガス)といった複数の優先的活動分野を挙げた。
3. リオデジャネイロ・カトリック大学(PUC-Rio)の国際関係学部教授でBrics Policy Centerディレクターでもある政治学者のパウロ・エステヴェス氏は、国際的な金融ツールによる中国のプロジェクトファイナンスは、国の資本であれ民間資本であれ、中国が直近の15～20年間に蓄積した外貨準備高の余剰と関係していると述べた。加えて同氏は、この取組は、近年の主に中国企業によるグリーンフィールド事業への参加、及び最近のM&Aへの参加に特徴づけられた、中国の「資本輸出」の継続と考えることが可能であると付け加えた。同氏はまた、「金融ファンドの設立はブラジルでは新しいことであるかもしれないが、中国はソブリンファンド又は民間ファンドを通じて、既に世界中で行っている。中国が関心のあるプロジェクトを推し進めるために資本を輸出する戦略である。注意を払うべきはこれらのファンドがインフラ分野(とりわけエネルギー、中でもクリーンエネルギー)に照準を当てていることである。これは中国が国際的な指導的立場を求める分野である」と述べた。

新刊書紹介

◆◆◆◆◆ 新刊書紹介 ◆◆◆◆◆

『写真家三木淳と「ライフ」の時代』

(須田慎太郎著)

かつてメディア世界をリードした報道写真誌「LIFE」の、日本人唯一の正規契約カメラマン三木淳は、報道写真家として朝鮮戦争も1950年代のアメリカも記録したが、ブラジルやメキシコにおける先駆的な仕事でも知られる。移民50周年祭(1958年)以降10年もブラジルに通い続けた成果は、写真集『サンバ・サンバ・ブラジル』(1967年刊)に集約されたが、このほど刊行された評伝でもこの辺の仕事ぶりが冷静な筆致で叙述されている。(平凡社 2017年9月 445頁 3,400円+税)

『LINA BO BARDI』

(和多利恵津子監修)

1946年イタリアからブラジルに移住した建築家リナ・ボ・バルディは、自邸「ガラスの家」やMASP(サンパウロ美術館)、SESCポンペイア、など

の建築作品を生み出し、市民に開かれた建築を追究した。彼女の社会派モダニズムが国際的に認知されるのは、つい最近でしかないが、国際的に著名な建築批評家でもあるアンドレ・コヘア駐日大使は序文において、この遅れて来た国際的評価を正視している。リナの全貌が収められたヴィジュアル本だ。(TOTO出版 2017年11月 288頁 4,300円+税)

『エルドラードの孤児』

(ミウトン・ハトゥン著、武田千香訳)

水声社版ブラジル現代文学コレクションの第一弾。現代のブラジル文学を代表する作家ハトゥンは、サンパウロ大学建築学部を出てから文学研究に転進し、カリフォルニア大学でも教壇に立った大学教授だ。その代表作が描く世界は、出身地マナウスに巨万の富をもたらした20世紀初めのゴムブームを背景に一財産を築いたアルマンドとその遺産を食いつぶす息子アルミントの物語だ。日系人も登場し、近代とアマゾンの神話世界が交錯する。

(水声社 2017年11月 188頁 2,000円+税)

月刊『思想』2017年12月号

(E・ヴィヴェイロス・デ・カストロ特集)

レヴィ＝ストロースは唯物論哲学研究から人類学研究に転進し、構造主義人類学の山脈を構築したが、その弟子ヴィヴェイロス・デ・カストロ教授(リオ連邦大学・国立博物館教授)は人類学研究から哲学(相対主義的認識論)研究へ新地平を切り拓いている。主要著作『食人の形而上学』、『インディオの気まぐれな魂』が邦訳されているカストロ教授のポスト構造主義哲学をめぐる、気鋭の研究者たちによる論稿集だ。(岩波書店 2017年11月 131頁 1,400円+税)

『抵抗と創造の森アマゾン』

持続的な開発と民衆の運動

(小池洋一・田村梨花編)

本書刊行を支援したマリナ・シルヴァ元環境大臣からの寄稿文のタイトルが「日没する国から日出する国への教え」となっているが、これまでのアマゾン開発の在り方を批判し、持続的開発のための対案としてアグロエコロジー、アグロフォレストリーを提示し、さらには先住民の現状や土地なし農民運動を論じている。セラード開発に象徴される工業型農業がもたらす環境破壊へのオルタナティブ構築を目指す論集である。

(現代企画室 2017年11月 319頁 2,700円+税)

!!「びっくり豆知識」!!

「冬季五輪」に喜んで参加しますか？

205、88、204、82、204、80——アップダウンが激しいが、一体何の数字だろうか。過去6大会の夏冬五輪・パラリンピックの参加国・地域数を、リオデジャネイロを先頭に並べたものだ。念のためリオの前はソチ、その前はロンドン、バンクーバー、北京、トリノである。18年初頭にピョンチャン(韓国・平昌)「冬季五輪」が予定されているが、参加国・地域はたぶん90カ国前後だろう。

もうおわかりだと思う。いわゆる「夏季五輪」に文句をつける気はない。ただ、世界中のどんな国の人でも同じルールで競い合うスポーツの祭典が「冬季五輪」によって、趣旨がねじ曲がってしまった。参加しようとしてもできない赤道周辺、亜熱帯、南半球の国々が地球上に半分以上もあることがわかる。

「冬季五輪」は南半球の真夏に行われる。つまり南の暑い国は完全無視だ。それがわかっていながら、ブラジルは1992年のアルベールビル五輪に初登場、98年の長野五輪にも選手1人を参加させている。トリノには10人、ソチには13人と少数ながら選手団を送っている。メダルは獲ったことがない。

熱帯・亜熱帯地域から最初に「冬季五輪」に選手を送り込んだのは45年前、1972年のフィリピンだそう。どこで

練習したのか不明だがスキー選手が2人登録されている。その後、カリブ海、アフリカ諸国も重い腰をあげ、参加国は徐々に増えてきた。

有名なのは1988年のカナダ・カルガリー大会のジャマイカ。参加種目は走力がモノを言うボブスレーで、狙いは悪くなかった。ボブスレーはスタート時に何人かで鋼鉄製ソリを押して、あとは氷の走路をそのソリで突っ走る。あのボルト選手のような陸上の短距離選手を集めたが、氷上では勝手が違ったのだろう。うまくソリを操ることができず、結果は惨敗。この珍事が『クール・ランニング』という映画になった。

そもそも「冬季五輪」は必要なのか。地球温暖化という避けられない問題もある。北極の氷は年々少なくなり、五輪候補地に雪が降らないこともある。資金不足で開催を尻込みする国も増えている。おまけに有色人種が参加しにくいとなれば事はやっかいだ。

今、ピョンチャン五輪に向けて、スキー、スケートのプレ大会が熱を帯びている。女子ジャンプの高梨選手、スピードスケートの小平選手、男子フィギュアの羽生選手らは決戦に向けて気を引き締めているだろう。でもブラジルなど「南の悩み」を知ると、騒いでばかりもいられない。(W)



価値を生み出す厳選された情報

中南米経済速報

経済情報を毎週月曜日にお届けします。地域経済圏の動き、インフラ整備やエネルギー・資源開発、各国のマクロ経済、投資案件、労働問題などを日本語でお読みいただけます。

■購読料：14,000円/月(税別)

CRONICA (クロニカ)

政治・治安情報を速報でお届けします。月～金に速報版を、火・金にレギュラー版を配信します。社会情勢、犯罪情報、武器密輸、麻薬問題、自然災害などを取り扱います。

■購読料：30,000円/月(税別)



有限会社イスパニカ

〒107-0052

東京都港区赤坂2-2-19

アドレスビル

Tel. 03-5544-8335

Fax. 03-5544-8336

Email: hola@hispanica.org

通訳・翻訳、語学研修も行っております

イスパニカ で検索！



日本ブラジル中央協会 からのお知らせ

協会イベントのご案内

参加のお申し込みは、協会HP
お申し込みフォームにてお願いします

2/7 在日ブラジル商工会議所 共同開催 新年会 (フェイジョアード・デイ)

昨年に引き続き、在日ブラジル商工会議所 (CCBJ)との共催で、新年会 (フェイジョアード・デイ)を開催します。内容が変更になる可能性があります。決まり次第、HPにアップします。

日 時：2018年2月7日(水) 18:30～

参加費：6,000円

フェイジョアードなど食べ放題、飲み放題

場 所：Brasílica Grill (予定)

住 所：東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル 5F

2018年1月開講

冬期ポルトガル語講座 受講生募集中

ポルトガル語初心者～上級者まで、レベルに合わせ6コースご用意しています。講座の概要、お申し込みは、<http://nipo-brasil.org/portugal/> をご覧ください。

- ◎ 初心者コース 金曜日 19:00～21:00 2018年1/19～3/16 【全9回】
講師：岸和田 マリレーネ先生
- ◎ 初級Ⅰコース 火曜日 16:45～18:30 2018年1/16～3/13 【全9回】
【16時45分】 講師：岸和田 マリレーネ先生
- ◎ 初級Ⅰコース 火曜日 19:00～21:00 2018年1/16～3/13 【全9回】
【19時】 講師：岸和田 マリレーネ先生
- ◎ 初級Ⅱコース 水曜日 19:00～21:00 2018年1/17～3/14 【全9回】
講師：古庄 マリア先生
- ◎ 中級コース 月曜日 19:00～21:00 2018年1/15～3/19 【全9回】
講師：上運天 (かみかた) ミゲル先生
- ◎ 上級コース 木曜日 19:00～21:00 2018年1/18～3/15 【全9回】
講師：三浦 マリエ先生
- ◎ 上級コース 土曜日 11:00～13:00 2018年1/20～3/17 【全5回】
【土曜隔週】 講師：三浦 マリエ先生

—— 皆様のご入会、心よりお待ちしております ——

法人・個人

新規会員募集中

会員数 2017年12月現在
法人会員 121社
個人会員 約310名

当協会の活動目的「日本・ブラジル両国間の相互理解、友好関係の促進に寄与する」にご賛同・ご支援頂ける方に、会員となることをご検討いただければ幸いです。

会員特典

1. 協会会報「ブラジル特報」の無料配布
隔月発行、年6回配布
2. 会員価格にて、講演会等のイベント、ポルトガル語講座に参加できます (会員限定イベントへも参加いただけます)
3. 会員交流懇親会へ参加いただけます
4. ホームページにて、会員限定情報をご覧いただけます

年会費

入会金は不要です

法人会員 1口 20,000円 / 個人会員 1口 10,000円
(2口以上) (1口以上)

日本ブラジル中央協会ウェブサイト
<http://www.nipo-brasil.org>

当協会の隔月発行の機関誌「ブラジル特報」及びホームページへのバナー広告掲載企業を募集しております。
広告掲載にご興味がある企業は、協会事務局までご連絡下さい。



ブラジル赴任の前に ビジネスで使えるポルトガル語を



ブラジルでビジネスや生活をする上で
欠かせないのがポルトガル語です。
BrAsia (ブレイジア) では、
赴任前と赴任後の語学研修を提供します。
「講師任せにはしない」
現地に精通したスタッフが進捗を管理します。

BrAsia (ブレイジア) 運営: 株式会社 漢和塾 〒104-0061 東京都中央区銀座1-14-12 楠本第17ビル5階
TEL03-6263-0716
お問い合わせは E-mail: brasia@kanwajuku.com HP: <http://brasia-j.com/>

37年間
南米一筋

驚き! 感動!!

魅惑のブラジルへの旅

ブラジルへのご旅行・出張は
創業 1979 年のアルファインテルにお任せください。

アルファインテルは南米系旅行会社で唯一の国際航空運送協会 (IATA) 公認代理店です。
航空会社との直取引につき、料金、座席確保に自信があります。

主要取扱航空会社: ユナイテッド航空、デルタ航空、ルフトハンザドイツ航空、エールフランス航空、
エティハド航空、エミレーツ航空、カタール航空、アエロメヒコ航空、タム航空、ラン航空、
アルゼンチン航空、ゴル航空、コバ航空、アヴィアンカ航空

アルファインテルはブラジル総領事館 (東京、浜松、名古屋) の登録業者です。
観光や短期商用はもちろん、永住権取得や技術支援などの長期ビザもお任せください。

ご旅行・ご出張の際の現地のホテル、ガイド、車輦の手配も実績ある弊社にお任せください。

株式会社アルファインテル
(本社) 東京都港区新橋3-8-6 大新ビル3階

観光庁長官登録旅行業 第1835号
社団法人日本旅行業協会正会員/OTOA正会員
TEL: 03-5473-0541 FAX: 03-5473-0540

アルファインテル



e-mail: info@alfainter.co.jp



BRASILICAGRILL
CHURRASCARIA

ブラジル バーベキュー食べ放題
+ ビュッフェ

¥5,400 (税抜き/tax not incl.)

ALL
YOU
CAN
EAT | 食
べ
放
題

予約:
www.brasilicagrill.com

〒107-0052 東京都港区赤坂3-10-4 赤坂月世界ビル5階
Tokyo-to Minato-ku Akasaka 3-10-4 Akasaka Getsu Sekai Bldg. 5F

赤坂見附駅
徒歩2分



赤坂駅
徒歩6分



永田町駅
徒歩6分





^{てつ}鉄は金属の王なる哉

鉄は文明を開き、社会を支え、そして未来を築くためになくてはならない素材です。

新日鉄住金は世界最高の技術とものづくりの力で鉄の可能性を極限まで追求し、“総合力世界No.1の鉄鋼メーカー”をめざしています。

だからこそ私たちは、「鉄」の文字の意味合いを「金属の王なる哉」と受けとめ、総合力世界No.1への意志と誇りをこめて社名ロゴに使用しています。

